

前橋の礎・製糸業の記憶

前橋絹文化研究会

1 研究の実施状況

- (1) 研究期間 2020年8月1日～2021年1月9日
- (2) 実施場所 調査研究… 前橋市街地
会議・学習会…前橋市総合福祉会館
見学会… 安中市、富岡市
- (3) 参加人数 10名
- (4) 研究内容 前橋の製糸業に関係する方からの聞き取り調査
調査対象者 32名（経営者18名、作業員7名、知人7名）
調査件数 28件（経営者17.5件、作業員5.5件、知人5件）

2 研究の成果

前橋の製糸業聞き取り調査において、経営者からは工場や従業員の様子、経営の創意工夫など、製糸業の実態を知ることができた。前橋の絹産業は、製糸業のほか、撚糸業、織物業、倉庫業、さらには製糸機械製造、真綿・座繰り糸など数多くの業種が存在し、それぞれが関連して成り立っていることを改めて感じた。作業員からは製糸業、撚糸業の作業の内容、工場の実態、工女さんの生活など当時の様子を教えていただいた。地域を知る人からは製糸業で栄えた前橋の様子や現在に残る遺構等、地理歴史的観点から様々なことを教えていただき、当時のことや絹遺産を後世に残す大切さを学んだ。

今回の調査研究は会員10名全員が班ごとに聞き取り調査を行い、報告書を作成し、その成果を冊子にまとめた。調査研究を通じて、会員の『前橋の製糸業』に対する意識が高まり、この成果を次年度の調査研究「前橋市内の絹産業マップと解説書作成」に役立てていきたい。

また、会員講師による学習会「前橋の製糸業」と見学会「碓氷製糸（株）と富岡製糸場及び世界遺産センター」を実施したことで、会員の製糸業に関する知識向上が図れた。

【別添報告書】

前橋の礎・製糸業の記憶

前橋の製糸業に関する聞き取り調査結果概要

1 趣旨（目的）

蚕糸業は幕末以来、近代日本の礎となった産業であり、群馬県は養蚕をはじめ富岡製糸場、西毛の南三社、そして前橋の製糸、さらには桐生、伊勢崎の織物や撚糸、染色などその全ての部門が存在します。しかし、現在はそのほとんどが風前の灯火、或いは皆無となってしまいました。

そこで、前橋学市民学芸員有志が絹ラボ事業の実施を機に前橋絹文化研究会を発足させ、市民はもとより県内外の方々に、県都前橋の礎となった製糸業を知っていただくことを目的に、前橋の製糸業に関する調査研究や会員の資質向上のための学習会・見学会を行います。そして、上記目的のため前橋の蚕糸業街歩き見学会を開催します。

2 組織設立

2020年4月28日の上毛新聞掲載記事「絹産業・絹遺産調査研究助成事業（絹ラボ）」を機に、前橋学市民学芸員の一人が同学芸員に呼びかけ、呼応した会員13名（調査開始時 10名）により、6月20日に前橋絹文化研究会が設立しました。設立会議では、会の目的や暫定役員、当面のスケジュール、調査研究取り組み内容及び絹ラボ応募内容等を協議しました。今年度の活動の中心となる「前橋の製糸業聞き取り調査」では、製糸業のほかに撚糸業、織物業、繭・生糸の仲買業や倉庫業など関連する分野を含めた調査対象とすることなどが決まりました。

3 活動内容と結果

(1) 会議・打合せ（設立会議＜6／20＞は除く）

期 日	内 容
8／1（土）	7月28日付絹ラボ奨励金交付決定を受けて開催 ①組織運営：規約設定、予算と会費、会員証（調査員証） ②活動：令和2年度年間活動計画 ③調査研究：スケジュール、調査体制、聞き取り事項（調査票）、会員の日程都合、調査対象者選定
8／29（土）	①調査対象者選定活動：資料リストアップ、会員情報 ②聞き取り調査：対象者への依頼文書、聞き取り事項等 ③見学会：碓氷製糸・富岡製糸場他（10／31） 蚕糸記念館・旧塩原蚕種（1／16）
9／24（木）	<役員（班長）打合せ> 10／3会議に向けての事前協議
10／3（土）	①聞き取り調査諸連絡 ②聞き取り事項と調査報告書 ③聞き取り対象者名簿（10月分日時決定）と調査者日程名簿 ④見学会：上記参照
12／19（土）	新型コロナウイルス感染拡大のため、「会員内の聞き取り調査結果発表会」の予定を「調査報告集」「会運営内容記載資料」等の配布及び聞き取り対象者からの寄贈品・資料及び絹ラボ購入品等の展示に変更

※1／12（火）予定の絹ラボ研究成果報告会リハーサルは新型コロナ感染拡大のため中止

(2) 聞き取り調査

1) 経過

①調査対象者選定：8月～9月

- i) 調査対象者リストアップ（書籍、統計資料等より）
- ii) 調査対象者募集広報（上毛新聞、会員住居自治体等）
- iii) 蚕糸業関係者や関係自治会からの紹介

②調査実施：10月4日～11月21日

調査対象者 32名（経営者18名、作業員7名、地域を知る人7名）

経営者 丸大製糸、丸登製糸、荒井製糸所、細井製糸所、＜菊水＞小林製糸所、奈良製糸所、赤城シルク（座繰り）、磯貝商店（真綿）、ヒラヤマ（製糸機械）、滝澤撚糸工場、栢野撚糸工場、三栄撚糸工場、池田撚糸工場、上毛倉庫、前橋商品市場（倉庫）、本橋織物、贄田シルク、西尾呉服店

作業員 赤石トミ子さん他

知る人 太田智也さん他

調査件数 28件（経営者17.5件、作業員5.5件、地域を知る人5件）

※ 調査件数は同時に複数の方の調査があるため、調査対象者数とは一致しない

③調査報告及び報告書集の作成

調査報告書（A4・1～2枚）は、調査者3名のうち1名が作成し、調査に参加した他2名に確認の後、事務局にほぼ1週間程度で提出された。なお、報告文書の確認を希望または必要と思われるものについては、調査対象者に確認・修正をしていただいた。

事務局は12月上中旬に提出された報告書の体裁を整え、会内発表会（12／19）までに報告書集を作成し、発表会（新型コロナの影響により受け渡しのみ）で会員に配布した。

④調査結果報告概要の作成

聞き取り調査の会内発表（報告書集配布）後、本調査結果概要を作成し、本概要を来る1／30（土）の絹ラボ研究成果報告会資料とするとともに、調査対象者への礼状に添えて本調査への協力の謝意を伝えた。

2) 調査者（会員）体制

岩崎 桂治（統括）

[1班] 竹下 容子（班長）、渡辺 丈夫、松本 勉・・・ 調査 9件（10名）

[2班] 川崎 始（班長）、堤 常雄、栗原 勇介・・・ 〃 9件（11名）

[3班] 奈良 孝美（班長）、中野 泰孝、丸山 磨・・・ 〃 8件（9名）

[班長対応]・・・ 〃 2件（2名）

3) 調査内容

事務局が各班員の都合と調査対象者の希望日のマッチングを行い、調査日時を決定し、調査対象者あてに日時、調査者名を記した依頼文書を送付した。なお、各班・人ごとに調査対象者の分野や調査数に偏りが無いよう配慮して計画した。

聞き取り調査は3名体制で行い、各班長が手土産の準備と報告書の作成者を指示した。調査は、コロナ禍の折、マスクの着用、訪問直前の手の消毒を実施するとともに、できる限りの短時間聴取に努めた。聞き取り者は、事前に調査対象者の業種・分野等に関することをできるだけ調べ臨んだ。

調査には全ての方が快く応じてくださり、さらに調査対象者から関係資料や物品の寄贈もあった。なお、どの調査においても話が進むと、当時の製糸業で栄えた前橋の状況が目に見えようであり、調査者（会員）は関係者の生の声を聞くことで、その状況を実感することができた。

(3) 学習会・見学会・報告会

会員の絹産業への興味と知識の向上を目的に活動の一環として、学習会・講演会を次のとおり開催した。

期 日	内 容
8／29（土） （学習会）	『前橋の製糸業』について＜本調査研究の基礎知識＞ 講師：岩崎 桂治（会員）出席者9名＜会議に続いて開催＞
10／30（土） （見学会）	碓氷製糸（株）、富岡製糸場、世界遺産センター 富岡製糸場入場料は減免措置、富岡製糸場の説明は会員、参加者10名

※1／16（土）見学会（前橋市蚕糸記念館、旧塩原蚕種）及び1／30（土）「絹ラボ研究成果報告会」（絹ラボ全体行事）は新型コロナ感染拡大のため中止

4 今後の活動と展望

本会は前橋の歴史・文化、特に前橋の絹産業に興味を抱いている者の会なので、次年度以降はさらに会員の学習を深めるとともに、今年度実施した「前橋の製糸業聞き取り調査」をもとに次のステップの調査研究に取り組んでいきます。具体的には、前橋市内の絹産業マップの作成と関係施設説明のための解説書作成です。そして、マップと解説書を利用して、県内外の多くの方々へ前橋の絹産業（製糸業）の歴史・文化とその魅力を

伝えていきます。また、そのために会員の資質と知識向上を図ることを目的に、学習会・研修会・見学会等も併せて実施していきます。

○関係者聞き取り調査報告（一部）

阿部 典之

[調査期日] 2020年10月8日

[調査者] 第1班 岩崎 桂治、竹下 容子、松本 勉（記録）

[調査対象者]

<企業・業者名> 丸大製糸（株）
 <性別・年齢> 男・62歳
 <分類> 経営者（製糸業<玉糸>）
 <住所> 前橋市国領町

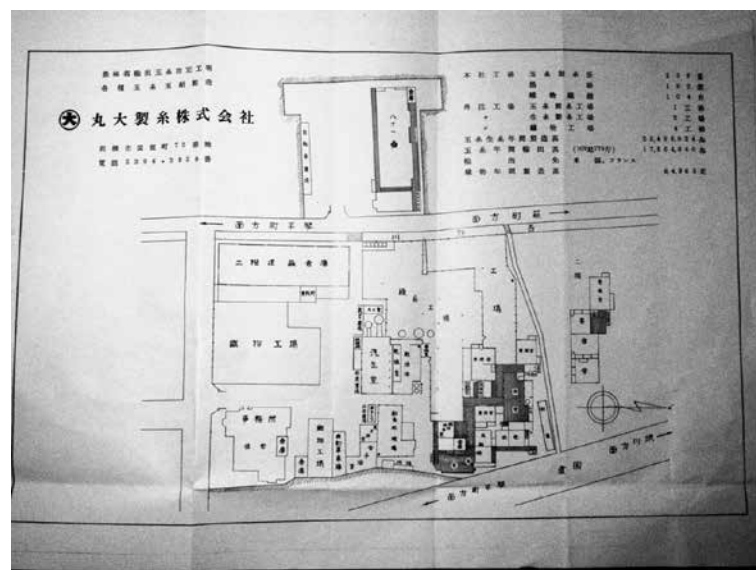


[調査結果（内容）]

1 旧・丸大製糸（株）

阿部典之氏の祖父文雄氏が、昭和26年丸大製糸株式会社を創業し、昭和30年代前半の最盛期には下表（昭和34年）の工場が稼働して、玉糸、反物等、作れば作るほど売れる時代であったようです。しかしながら、安価な中国製製品におされ、1998年に製糸業を廃業し、不動産管理業に改組しました。

工場分類	工場種類	規模
本社工場	玉糸製糸釜	238釜
	揚場	192窓
	織物織機	104台
外注工場	玉糸製糸工場	1工場
	玉糸製糸工場	2工場
	織物工場	4工場



◎最盛期

昭和30年頃までは、ほとんど休みなく操業していたそうで、従業員は380人近くいたそうです。従業員の多くは女性で、県内各所から集まり、敷地内に寄宿舎・食堂・浴室等が設けられ、近隣の従業員のため保育園も設置されていたとのこと。また自衛の消防隊があり、近所の火事の際には出動していたそうで、近隣の皆さんから、感謝されていたようです。

ここに、群馬県玉糸生糸協同組合玉糸研究委員の「玉糸・繰糸教婦の参考」という教則本があります。昭和26年5月に発行され、その趣旨は玉糸繰糸の教婦教育の資料として、とあります。経験がものをいう座繰ではありますが、この教則本によって均一な高品質の「群馬ブランド」を作っていこうという熱意が感じられます。



丸大製紙（株）商標

2 現・丸大製糸（株）

現社長の阿部典之氏は父の前社長郁二郎氏が高齢のため、お勤めの富士重工業株式会社を早期退社され、丸大製糸（株）に入社されました。富士重工では、大型バスの設計を担当されていたそうです。製糸業を廃業後は、広大な工場跡地を商業施設に変え、その管理運営をしています。

祖父文雄氏の思い出は、3人の男の子供は丸大製糸に入社しましたが、かなり仕事に厳しかったようですが、孫である典之氏たちには優しく接してくれ、いろいろな所へ連れて行ってもらったそうです。

3 高松宮宣仁親王殿下の視察

数ある著名人の工場視察の中でも、昭和34年8月17日に高松宮宣仁親王殿下の視察がありました。その当時の写真が事務所に掲げられており、その写真を私たちも拝見させていただきました。

4 創業者・阿部文雄氏

阿部文雄氏は明治35年11月24日に宮城県石巻に生まれました。尋常高等小学校を卒業後、前橋市細ヶ沢町の樋口本店に勤務されました。当初は繭の運送業をしていたそうです。昭和4年に丸大繭糸合名会社を創業しました。その後は会社経営のみならず、群馬県玉糸生糸協同施設組合の重職を歴任されました。昭和26年からは丸大製糸株式会社代表取締役として、農林省の各種委員としてご活躍されました。

当然、公私にわたるご活躍に、昭和34年に紺綬褒章授与、昭和38年に群馬県功労者表彰、昭和39年に黄綬褒章授与、昭和42年に大日本蚕糸会総裁高松宮宣仁親王殿下より蚕糸功績章授与、昭和48年には勲五等雙光旭日章授与と数々の栄誉に浴されました。

※典之氏は、数々の資料を用意されておりました。本当にありがとうございました。

赤石 トミ子

[調査期日] 2020年10月24日

[調査者] 第3班 中野 泰孝、岩崎 桂治、渡辺 丈夫（記録）

[調査対象者]

〈企業・業者名〉 金井製糸所
片倉工業 石原工場（熊谷）
〈性別・年齢〉 女 82歳
〈分類〉 作業者（製糸業）
〈住所〉 前橋市広瀬町





[調査内容]

1 赤石さんが働いた所

(1) 金井製糸（朝日町3丁目・元の日赤の裏の通りにあった）

昭和28年4月から昭和35年まで働いた。（15歳～22歳）

金井製糸には寮があった。部屋は6部屋あり、各部屋3～4人。利根、沼田方面から来ていた人たちが利用していた。寮は、賄い付で食堂があった。赤石さんは、食堂の手伝いをすることもあった。

赤石さんは、通勤していた。通勤は6人位。

赤石さん達は、糸を引く仕事をしていましたが、その他に、糸を束ねたり、検査したりして輸出の準備をする仕事をしていました。20人位いた。

糸を引く仕事は、2～3カ月で覚えることが出来た。そして、2～3年で仕事を教える教婦となった。

勤務時間は、8：00～17：00

昼の休憩は、12：00～13：00

トイレは交代で、給料は見習い期間は少ない。引いた糸の量で決まる。1か月3,600円位だった。給料の半分は、家に入れた。

慰安旅行があった。バスで一泊二日で、草津や伊香保に行った。

タイムレコーダーがあった。8：00に教婦が一斉に動かした。

仕事が終わってからの、卓球が楽しみだった。

(2) 片倉製糸石原工場（熊谷市）

金井製糸が、昭和35年に倒産したので、半年くらい経ってから片倉製糸に勤めることになった。

昭和35年から昭和37年まで働いた。（22歳～24歳）

寮に入った。

仕事内容は、金井製糸と同じ仕事をした。24歳の時、結婚で辞めた。

勤務時間は、二交代制だった。

午前勤務：5：00～12：00

午後勤務：12：00～19：00

給料は、はっきり覚えていないが、金井製糸よりは、多かったように思う。

春繭は、糸が長くて、回転も速いので、糸を引きやすく、糸目が出た。

晩秋繭は、糸が短くて、回転も遅いので、糸を引きにくく、糸目が出なかった。

1 釜—20枠を持つ。

2 釜—40枠を持つ（ベテラン）。

2 共通して言えること（金井製糸と片倉製糸）

糸に手がかぶれることが悩みだった。酢酸で治療した。

休みは、日曜、祝祭日。年末年始。お盆。

製糸の仕事に打ち込んだ青春を振り返って：良かったと思う。良い人に恵まれた。

金子 和明

[調査期日] 2020年10月19日

[調査者] 第1班 松本 勉、岩崎 桂治、渡辺 丈夫 (記録)

[調査対象者]

<企業・業者名> 有限会社赤城シルク
<性別・年齢> 男・87歳
<分類> 経営者 (座繰製糸集荷仲買)
<住所> 前橋市上細井町



[調査内容]

1 金子さんの話

父の仕事を受け継ぎ、出釜 (上州座繰) の仕事を行うようになった。
細ヶ沢町、製糸事業者が集中していた。
座繰り製糸が集中
繭を持って行って糸を持って来る、糸は秩父に売った (夜具地に使われた)
太平洋戦争が始まり、一旦、仕事を辞めた。
終戦後、仕事を再開した。母が始めた。その後、金子さんが後を継いだ。
高校を終わるか終わらないうちに見習いに行った。23歳ぐらいの時独立した。
場所は、岩神 (前橋三中の近く) で独立した。
その後、所帯を持って、西片貝に行って、そこで仕事を始めた。
大正から昭和にかけて勢いがあった。終戦後、製糸業界だけで電話帳一冊ができた。
機械製糸、玉糸製糸、座繰り製糸、撚糸、生糸商、繭の売買、副蚕糸、蛹工場
繭検管理士、繭検定所、生糸検査所、蚕糸試験場、繭・糸の倉庫
運送、燃料、ほとんど製糸に関係していた (昭和20～30年頃)
群馬銀行、横浜銀行、足利銀行—製糸に関係していた。
繭、生糸—銀行は無制限に資金を貸し出してくれた、昭和25～昭和50年位まで

2 現金収入～桑しかなかった・養蚕～

女性は、工場、自宅で糸を引いていた。
昭和40年代までは、上州座繰
(富士見村、赤城村、子持村、昭和村) 3,000～4,000軒

3 金子さんの会社

500人位に外注していた—飛び抜けて多かった。(同業者20人位)
1週間に2回糸を集めに行った。
地域に出張所を設けた。
現金で払って糸を買った。
(出張所が出る時はお祭りになりお店が出た)
女性たちは、夜寝ないで糸を引いた (ご主人をはじめ、家中で糸を引いた。一家に2、3台の座繰を置いて糸を引いた。昭和50年位まで続いた)
2人は、今年の9月までやっていた。

京都のしょうざん (織物会社) に糸は納められるが、「赤城の節糸」じゃないとだめだと言ってくれる—コート、紬などは、節糸じゃないと具合が悪い。ただの生糸は光ってしまうのでだめらしい。

1年間糸を引いているので、繭は上毛倉庫を利用して蓄えておく

(引く人の中心は赤城村の人)

春は、お花見（観桜）で500人の人に楽しんでもらう。

金子さんの会社である赤城シルク有限会社は2、3年前に解散した。従業員は7、8人。

4 金子さんの役員歴

前橋国用製糸共同組合城東支部長、赤城太糸協会会長

5 製糸業の盛衰

昭和30年頃が絶頂、40年頃まで勢いがあった。

40年頃から下り坂になりはじめた。

50年代から完全に下り坂になった。

60年代からは、見通しが立たなくなった。

太田 智也・柿沼 孝・柴田 金吉

[調査期日] 2020年11月19日

[調査者] 第2班 岩崎 桂治
堤 常雄
川崎 始 (記録)



[調査対象者]

<氏名・性別・年齢・役職>	太田 智也	男	77歳 (自治会副会長)
	柿沼 孝	男	80歳 (自治会会長)
	柴田 金吉	男	85歳 (元自治会会長)

<分類> 知る人

<住所> 前橋市住吉町

[調査結果 (内容)]

主に太田さんが資料をもとに旧小柳町を中心にお話しされた。旧愛宕資料館所蔵の写真や図面も見せていただいた。以下は、資料を要約したものである。

1 生糸生産・輸出の概観

- ・弁天通から橋（比刀根橋）を渡り小柳町に入ると蛹の匂いがした。
- ・安政年間から昭和8年まで日本の貿易の一位は生糸だった。
- ・明治10年、県産生糸の三分の一は前橋産で、同32年37%、大正14年は45%だった。
- ・昭和12年の前橋の工業生産額は2840万円、うち生糸が56%、玉糸が5%。

2 小柳町の賑わい

- ・昭和4年の交通量調査では、小柳町比刀根橋橋上が中央前橋駅近辺に次ぎ市内第二位。
- ・柳座という芝居小屋があった。竹久夢二も来た。
- ・近くに「岩神」の路面電車（東武鉄道伊香保軌道前橋線）の駅があり、渋川方面からの荷物の積み降ろしが便利だった。（戦前のことと思われる）
- ・乾繭取引所が昭和27年にできた。

3 製糸工場の様子

- ・家の裏の長屋ではみんな糸をひいていた。（柴田氏談）
- ・大正4年住吉町二丁目で、製糸工場21軒、玉糸製糸8軒、他糸繭商6軒。
- ・某製糸所の間取り図を見せてくれた。敷地500坪工女100人、帳場（荷受所か）
- ・男女別の寄宿舍・繰糸所・病院まであった。

- ・昭和40年代まで操業していた某製糸所は、最盛期には女工22人、男性2人（ボイラーマン他）を雇っていたが、惜しくも先日ご主人が亡くなられた。なお、従業員は全員通勤、勤務は8時～17時半。（昭和30年生まれの川崎の記憶にあります）
- ・大正時代は景気が良くて、製糸家はもうお金はいらないとっていたとのこと。

滝澤 宇喜江

[調査期日] 2020年11月18日

[調査者] 第1班 岩崎 桂治、松本 勉、竹下 容子（記録）

[調査対象者]

<企業・業者名> 滝澤撚糸
 <性別・年齢> 女・73歳
 <分類> 経営者（撚糸業）
 <住所> 前橋市住吉町



[調査結果（内容）]

1 滝澤撚糸の息子であるご主人と結婚する

滝澤宇喜江さんは昭和22年佐波郡東村の生まれ。家は兼業農家で、父は公務員、母が畑をやっていた。実家では養蚕はやっていなかったが、本家は養蚕をやっていたので、養蚕関係の仕事に親しみはあった。24歳のとき（昭和46年）仲人さんに、撚糸業の跡取りでいい人だからと勧められ「まあいいかな」と結婚した。仲人さんは「きっと床の間に飾っておいてくれる」といったが現実には全く違っていった。撚糸のことは嫁にくるまで知らなかった。

昭和47年に長男、50年に長女が生まれた。

2 夫のこと

夫は滝澤撚糸の3代目。5人兄弟の2番目だった。高校3年のときすでに証券会社に就職もきまっていたが、父が倒れ半身不随となったため家業をつぐことになった。（兄は群大医学部の学生、下に二人の弟と一人の妹がいた）

宇喜江さんが嫁にきたとき、父も体が不自由ながら家で「アミソ掛け」の仕事をしていた。70代位の女性がその仕事を手伝っていた。工場のほうには従業員が5～6人おり、夫と姑が工場のほうをやっていた。どちらかという、姑が指示して夫が協力してやるという感じ。厳しい姑だったが、仕事の切り盛りをするのできつくなって当然だったかもしれない。

嫁にきたとき、夫の弟は大学3年、妹は大学1年で、宇喜江さんは朝5時起きで働いた。夫は優しかった。

3 工場を手伝う

子供が小学校に入ると工場にも入って働いた。撚糸業は問屋さんから預かった生糸を撚って反物の材料になる糸にする仕事。滝澤撚糸は主に着物の裏地になる細い糸を作っていた。工場には撚りの機械が3台、糸を揃える機械が2台、揚げ場の機械が2台あった。家のものもみんな工場に入って工女さんと一緒に働いた。切れた糸をつなぐとき、うまく結ばないと反物にしたとき傷になり「お宅の糸は」と文句を言われたりする。宇喜江さんは上手に結ぶことができた。（明和家政科の出身）

機械は常に（夜中でも）ガチャガチャと回っており、家族の者誰もが夜トイレに起きると異常がないか見にいった。工女さんには厚生年金があったが、お金がかかるからと家のものにはなかった。

4 夫が勤めにする

嫁にきた頃から、オイルショック、ドルショックと続き、会社の経営は急速に厳しくなっていた。布が売れなくなって工賃が減らされた。機械が故障すると直すにもお金がかかり、結婚して12年後（昭和58年頃）夫

は外に勤めにでた。その後2～3年間は、宇喜江さんが一人で工場をやった。

しかし状況はどんどん厳しくなり、問屋さんが手形になった。手形が割れるのに5カ月くらいかかった。滝澤撚糸は手形が回収できなくなる前に閉鎖した。(昭和62年頃?)

5 舅、姑、夫を見送る

舅は子供が小4・小1のとき、甲状腺ガンで亡くなった(71才)

姑は101才まで生き老衰で亡くなった。「嫁には世話にならない」と言っていた厳しい姑だったが、亡くなる前に「ありがとね」と言ってくれた。

夫は62才でパーキンソン病になり、最初の5年くらいはよかったけれど、その後だんだん不自由になり、昨年76才で亡くなった。

今は娘と一緒に住んでくれている。

*働きづめに働いて、大家族を支え撚糸業の最後を支えた宇喜江さん。淡々と語る言葉からそのご苦勞がしのべられます。これからの老後が幸せなものでありますように願わずにはられません。

荒井 泰男

[調査期日] 2020年10月11日

[調査者] 第2班 堤 常雄、栞原 勇介、岩崎 桂治(記録)

[調査対象者]

<企業・業者名> 荒井製糸所
 <性別・年齢> 男・83歳
 <分類> 経営者(製糸業)
 <住所> 前橋市若宮町



[調査結果(内容)]

1 製糸所創業の経緯

- ・父が昭和8年に長野県上田市から前橋に来た。母の妹が前橋の大岸製糸で糸を引いていたのが縁で、父が大岸商店(商社)で繭乾燥の仕事を行った。
- ・昭和12年から荒井製糸所として製糸を始め戦争中も休止することなく操業し、昭和28年に会社組織になり、平成15年まで操業した。(前橋で最後の製糸業者)

2 製糸経営状況

- ・最盛期の従業員数は23人位。
- ・昭和43年頃からは原料繭はほとんど外国産(中国、ブラジル、北朝鮮、トルコ、イラン)を使用した。昭和42年に組合(国用製糸)がソ連の繭を斡旋したが買わなかった。ソ連の繭は見た目はよかったが、糸にならなかった。自分で確信できるものでなければ購入しない。ソ連の繭を買わないことで荒井製糸は生き残れた。なお、繭はプレスして容積を1/3に減らし、輸送経費を低く抑えた。
- ・神戸製糸が10年使用した製糸機械(ニッサン式・スクラップ状態)を購入して、機械を自分のおもちゃと思ってやってみて、ダメだったら製糸を止めるつもりでいた。製糸機械について徹底的に勉強し、全て自分で修理、改造できるようになった。特に、電気についてはニッサンの社員よりも知識があった。(ニッサンは機械を作るだけで製糸は行わない企業であり、これでは機械の向上はない)
- ・建物は元4軒長屋を買い取り、自分で柱を抜き、工場とした。何しろ経費を掛けないことが重要である。
- ・昭和50年代前半、製糸業が最も厳しい時期に業績を上げたことで、全国から多くの方が見学に来た。地元の大製糸は見学に来なかった。
- ・来たのは富岡製糸場の工務5名で1日中見学し、これが富岡製糸所の機械の改良に繋がり、大変喜ばれた。
- ・昭和53年から5～6年間、毎年1回、北海道、九州、四国、沖縄、ハワイへの従業員慰安旅行を5～6泊で行った。旅行費は全て会社が負担(約1,000万円位)し、泰男さん本人は行かず、この間に製糸機械の

点検・修理を行った。従業員自身も旅行の小遣いや衣服に費用がかかるので一生懸命に働いた。

- ・使用した製糸機械は6釜（相向いに3釜ずつ〈1釜20枠〉）1セットであり、普通4～5人が作業にあたる。泰男さんは従業員が出勤する前の朝6時から8時まで、一人で機械を動かし糸を引いた。これも、万全な機械整備を行うからであり、従業員は遊んでいるように見えるくらい楽であった。
- ・従業員勤務は週5日制（土・日休み）だが、泰男さんは土・日曜日に機械の整備を行った。
- ・会社経営では20年間連続で黒字を達成した。
- ・できた生糸の販売先は良い会社に恵まれた。（会社名の話がなかった）

3 製糸業全般の話

- ・製糸業衰退の時期、早くやめたところは家が残ったが、遅くまで操業したところは土地までなくなった。
- ・泰男さんは国用製糸の役員をやり、市内の中小製糸業者の機械の面倒をみた。

4 経営哲学

- ・業績が良好なことから創立時50万円の資本金を昭和54年に1,000万円に増額した。国用製糸ではかなり大きい会社となった。配当金を10%とすれば、50万円なら5万円であるが1,000万円なら100万円であり、預金収入も増える。税金は多く取られるが、半分納めても半分は残る。泰男さんはこの当時、4～5時間しか寝ないで仕事をした。
- ・昭和31年に父が倒れ（泰男さん19歳）、昭和42年に荒井製糸所が火災を起こした。数日後に父が亡くなり、泰男さん（30歳）が後を継いだ。その時会社の赤字は450万円あった。
- ・昔の人の考え「借金の金利は払うが税金は払うのが嫌」に対し、泰男さんの考えはこの反対で「金利は払いたくないが税金は払う」である。
- ・市内の製糸機械を扱う会社（平山章さん）が製糸機械部門をやめるときに、そこから部品をたくさん購入した。この部品代は必要経費として計上できる。そして、この部品を使った機械の修理を自分で行うことで機械の資産価値はそのまま、性能は向上する。この修理を業者に頼めば修理代はもとより、機械の価値、つまり資産増額となり固定資産税も高くなる。

※以上、泰男さんは、ご本人の言葉「前橋の製糸業は誰よりも私が一番知っている」のとおり、相場の上で製糸業が生死業と言われる中、優れた経営哲学を持ち、最後まで前橋の製糸業の火を灯し続けた功績は実に素晴らしく、言葉の節々からその自負が感じられた。